

有田焼 上絵付師

川尻信二

さん

深川製磁株式会社





「今年で30年目です。仕事を覚えるのに夢中ででしたから早かった気がします。上の娘も社会人になったし……」と話す川尻さん。家庭では二女一男の良きパパだ



チャイナ・オン・ザ・パーク内にある川尻さんが働く西有田工場



明治時代に建てられた深川製磁本社
深川製磁株式会社 〒844-0005 佐賀県西松浦郡有田町幸平1-1-7
TEL 0955-43-2151(代) FAX 0955-43-2799

日本を代表する磁器として有名な「有田焼」。一六一六年に、李参平が有田泉山で原料となる陶石を発見し、我が国で最初の磁器を焼いたことで始まった。

江戸時代、鍋島藩の統括のもとに生産された磁器は、隣接する伊万里港から積み出され、「伊万里焼」として世界に輸出された（それらは現在「古伊万里」と呼ばれている）。

こうした四〇〇年の伝統を持つ有田には、今までも柿右衛門、今右衛門をはじめ数多くの窯元や工房が立ち並んでいる。深川製磁も、その中のひとつで、一八九四年に深川忠次によって創業され、『気韻ある透白磁』を特徴としている。明治四三年に拜命した宮内庁御用達として、明治、大正、昭和、平成と、皇室、宮家に器を納めてきた。

和洋食器、花瓶、美術工芸品などの、輝く白磁に澄んだ青が映える染付、深みのある瑠璃色、あざやかな赤絵……、製品の気品と優雅さ、格調の高さに定評のある深川製磁の製品、これらの製品の上絵付けは三人の職人さんが担当している。

その中の一人が川尻信二さんだ。西有田に生まれた川尻さんは、六歳のときポリオにかかった。その後遺症で下肢に障害が残り、松葉杖での生活となった。小学校六年のとき親元を離れ、佐賀市の養護学校へ転校、高等部を卒業するまで寮生活を送った。

高等部のとき、クラブ活動として陶芸に接する機会があった。土を練り、ろくろを回し、作品を焼き上げた。このとき川尻さんは、焼き物づくりは『おもしろい』と感じた。卒業したら地元に戻って、焼き物づくりの仕事に就きたいと考えた。それが深川製磁への入社につながった。



染付、本焼を終えた製品に細く線を入れる。焼き上がると金色になる

製品により絵柄が違う。季節や天気によって絵の具の状態も変わる。常にベストに管理し、仕事を進める



上絵付の線描き作業。細かな絵に細い線を入れる。息をこらして筆先を見つめる川尻さん。「仕事は、やりがいがあるっておもしろいが、責任が大きい」



上絵付の同僚、原忠範さんにアドバイス



焼き上がった製品をチェック。仕事の結果が気になる

入社して三〇年目を迎える川尻さんは、染付を二〇年担当、その後上絵付を始めて一〇年目になるベテラン。伝統の技法を守り、さらなる挑戦に意欲を燃やしている。



川尻さんの担当した製品の一部。数十万もする高価なものが多い。以前、故小渕首相がローマ法王を訪問したとき、記念品として贈った花瓶も、川尻さんが描いた



地元、佐賀での大会に選手としても出場

津山国際交流車いす駅伝大会での力走



川尻さんは両下肢が不自由、ふだんは松葉杖を使っているが、車いすマラソンにも出場する行動派だ。また、地元で開催される「佐賀セラミックロード車いすマラソン」の実行委員会事務局として、資金づくり、準備、運営に大活躍。(写真は、週2〜3回、自宅近くで練習に励む川尻さん)